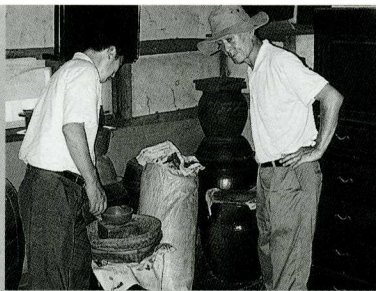
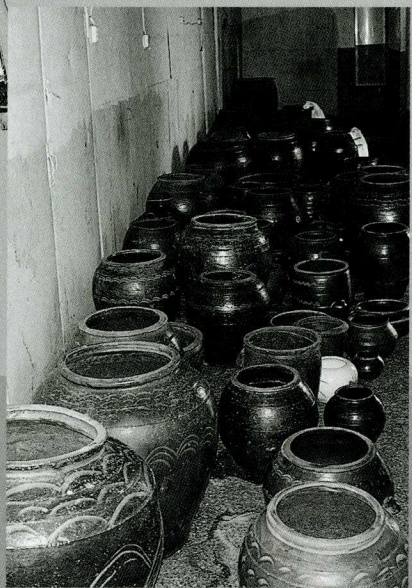
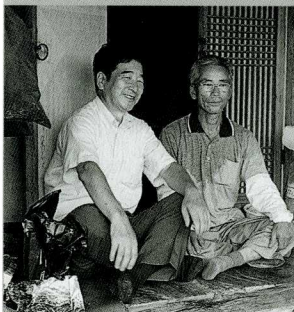


組み立てられた喪輿

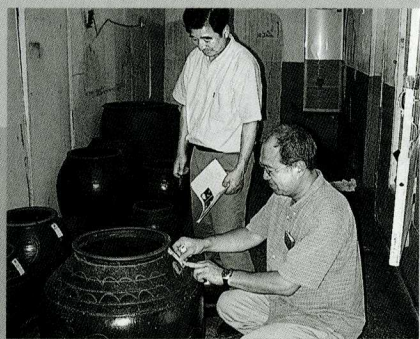
かつての映画館に集められた甕



甕の収集作業をしている
朴柱彦さんと伊藤先生



李隱鎭さんと
伊藤先生



甕のチェックをする
伊藤先生と筆者(手前)

チンド かめ サンヨ
珍島の甕と喪輿

—館外の研究者との共同収集—

地球を
集める

朝倉 敏夫

(あさくら としお)

本館民族文化研究部



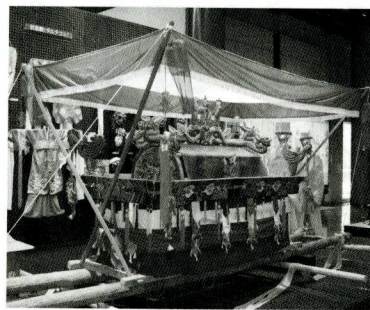
珍島と伊藤亜人先生

二〇〇五年七月、わたしは戦後の日本文化人類学における韓国研究の草分けの一人である伊藤亜人先生と珍島にいた。珍島は朝鮮半島の南端部に位置する島である。伊藤先生が初めて珍島を訪れたのは、一九七二年の七月のことであったという。そして、この島のひとつの村を調査地に定めた。それ以来、一九八〇年代にかけて、この村を何度も訪れ調査を続けてきた。また、その後もほとんど毎年のように珍島を訪れ、拠点をつらね(小都市)に移すとともに研究テーマを広げてきた。この三〇余年にわたる伊藤先生の研究の足跡は、『韓国珍島の民俗紀行』(青丘文化社、一九九九年)に描かれている。

わたしが珍島に行ったのは、伊藤先生からの提案で、珍島の甕を収集するためだった。韓国の甕は、キムチや醤油・味噌などを入れる容器としてだけでなく、家庭の息災を願う信仰とも深くむすび付いている。伊藤先生は、かつて「甕と主婦」において、珍島の一家庭にある八二個の甕の種類と役割を調査し、甕が主婦の地位と領分・生活観の象徴としての側面を有していると指摘した。また、「韓国農村における土器の使用」に関わる記録でも、甕の種類、用途の広さ、屋敷における配置を示し、「珍島の農村においてこれほどまで多くの甕器が用いられているこ

とは、指摘されるまで現地の人々ばかりが民俗学者たちも気付かなかったようである」と述べている。

今回は、この甕だけでなく、珍島で一九八〇年代まで使われていた喪輿も収集できることになった。喪輿は、葬式の野辺送り、死者を墓に運ぶために使われる輿である。民博の展示場には、慶尚道の喪輿が展示されているが、全羅道の喪輿は形態が異なり、せびとも収集したいと思っていた。



朝鮮半島の文化展示の喪輿

「物」の価値を知らせる

収集の目的の第一は、失われゆくものを保存することにある。韓国では一九七〇年代から一九八〇年代にかけては、まだ伝統的な生活が残されていた。わたしが初めて韓国に行った、ほんの三〇年前でも、農村においては木と土と石と紙の住まいであったが、いまやステン

レスやガラスをはじめ新建材が主流になっている。この三〇年で物質文化は急速に変化し、甕はプラスチック容器に、喪輿は担ぎ手がいなくなり霊柩車が変わっていった。

もうひとつの目的は、これらの生活用品を民博に収蔵することにあつた。伊藤先生の言を借りれば「韓国では日本に比べると物に対する関心が一般に低いといわざるを得ない」。それは「玩物喪志」という表現にあるように、物に執着することとは内面の徳性の涵養のためにはむしろ妨げとなるとみなされ、戒められていたほどである「からだ」という。国立の博物館が収集することで、韓国の人たちに生活用品という「物」にも価値があることを知らせたいというのが、伊藤先生の心のなかにあつたようだ。

韓国研究者のメッカに

今回の収集は、大学共同利用機関として館外の研究者である伊藤先生との共同でおこなつたが、その作業は、朴柱彦さんの協力を仰いだ。朴さんは、前述の『韓国珍島の民俗紀行』にも「その三〇年間近い今日に至るまで、私は邑内にいる時いつでも夜遅くまで朴柱彦氏から珍島について実に興味深いそして人間味あふれる話を聞いてきた」とあるように、伊藤先生の珍島における研究パートナ

ーだ。朴さんは、島中をまわって、伊藤先生が調査した一家庭にあつたものと同じ種類、形の甕を探し出してくれた。それらをあらかじめ借りておいてくれたかつての映画館に並べ、わたしと伊藤先生がひとつずつ、その名前と大きさを確かめていった。喪輿は、今では使われず、そのまま置かれていたものを一部補修してもらい、その組み立て方を教えてもらいながら、ビデオで撮影した。

わたしたちの収集作業の合間に、伊藤先生の弟子である全北大学の林慶澤さんと同志社大学の板垣竜太さんが、日韓の学生交流のかたわら、珍島に学生を連れて来た。伊藤先生は、ご自身が暮らされた家にも学生たちを案内し、ご主人の李隱鎭さんを紹介した。この村の会館には、伊藤先生が一九七〇年代にこの村で撮った写真が飾られている。それらの写真は、伊藤先生が東京大学を定年退職された二〇〇六年三月に『韓国夢幻—文化人類学者が見た七〇年代の情景—(新宿書房)』というタイトルで刊行されている。そこには、朴柱彦さんと李隱鎭さんが、「珍島人」となった伊藤先生とのつながりを記した文章も寄稿されている。

モーゼの奇跡で有名な珍島だが、日本文化人類学の韓国研究者にとっては、この島がメッカになっているといつても過言ではないだろう。そして、その島の生活用品が民博の資料となっている。